

岐阜に請來された媽祖について

——戦後日本における媽祖信仰受容の一例として——

中 塚 亮

はじめに

本稿では、岐阜の高橋夏三郎氏（以下、高橋氏）らが一九六九年以降に北港朝天宮をはじめとする臺灣の諸廟から媽祖の分靈を請來した事例について、その概要と経緯、背景を論じる。日本における媽祖信仰は、近世以降の中國人の移動に伴う傳來が中心で、日本人が主體となつて媽祖を受容したケースはほとんど見られない。高橋氏らによる媽祖分靈の請來は日本における媽祖信仰の受容を見る上で、貴重な事例と言える。

本事例については浦恒一氏が「一九六九年五月、岐阜市の聖母堂が、水天權現を祀るために、わざわざ臺灣北部の媽祖廟朝天宮から媽祖の分靈の神像と千里眼、順耳マツ及び侍婢の香花女の神像を勸請した」と記しているほか、窪徳忠氏にも言及が見られるが、北港朝天宮から媽祖を請來した以上のことはわかつていなかった。⁽¹⁾

そんな中、近年、黒羽夏彦氏が梧棲朝元宮に關連する二通の書簡を發見・紹介した。⁽²⁾一通は、一九七一年に當時の岐阜市長・上松陽助による、媽祖の加護により市長選で當選できたとのお禮の書簡で、高橋氏が仲介し届け

たものである。もう一通は一九八九年（平成元年）一月に高橋氏（宗教法人日本朝天宮代表役員との肩書きがある）から送られた、梧棲朝元宮による昭和天皇快癒祈願へのお禮のものである。

さらに、日臺の當時の新聞調査から、次のように請來の状況を整理している。

岐阜市から高橋夏三郎氏を代表とする「聖母會」の一團が松尾吾策・岐阜市長のメッセージを携えて臺灣へ赴き、媽祖像を奉戴して日本へ戻ったのは事實である。『聯合報』一九六九年四月二二日附の記事は、高橋氏からの手紙には岐阜市議會の同意も得て岐阜公園内の「日中友好庭園」に「聖母堂」を建てる計畫がある旨も書かれていたと報道しているが、實際には適切な建設場所が見つかるまで高橋氏が個人で保管するとしており（『中日新聞』一九六九年五月一日附）、結局、そのまま實現されないうままだったのではないかと推測している。⁽³⁾

このように、黒羽氏により、一九六九年の媽祖請來の状況はかなり明らかになってきた。だが、兩書簡が示すように、高橋氏と臺灣の媽祖との關わりはその一年で終わったものではない。

今回論者は高橋氏の次男の高橋周平氏および、元日本朝天宮理事の吉田武義氏への聞き取り調査を行うとともに、高橋周平氏より當時の寫眞を拜見する機会を得た。⁽⁴⁾ 本稿では、これらの證言や資料、さらには新聞記事や、北港朝天宮の機關誌である『聖女春秋』などの資料調査を通して、高橋氏による媽祖の分靈請來の經緯と具體的な状況、その背景を明らかにしたい。

一 戦後日本における媽祖信仰受容の状況

まず前提情報として、高橋氏の請來時點までの日本における媽祖信仰受容の状況を概観しておく。

日本への媽祖信仰の傳來は、明朝から冊封體制下の琉球に渡った人々によってもたらされたのを嚆矢とし、一四二四年までには彼らが居住した久米村に媽祖を祀る上

天妃宮・下天妃宮が建てられている。⁽⁵⁾これが現在確認される最初の媽祖廟である。次いで琉球同様中國商人の往來が見られた鹿兒島にも傳來した。⁽⁶⁾

江戸期になると、海禁政策下でも中國船の來航が認められていた長崎では日中間の貿易が盛んに營まれ、在留中國人の數も増加し長崎の人口六萬人の一割をも占めるまでに及んだ。⁽⁷⁾一六二〇年代に建てられた三唐寺（興福寺・福濟寺・崇福寺）では媽祖堂が備えられ祭祀が營まれたほか、入港中の中國船の媽祖（船菩薩）も預けられ祀られていた。⁽⁸⁾

一方東日本でも、一六七七年に長崎・興福寺の住職の招請により杭州・永福寺から來日した東臯心越が、徳川光圀の招きを受けて水戸に移ると、それを機として媽祖が祀られるようになった。さらにはそこから青森縣大間にも傳播（一七世紀末）していく。⁽⁹⁾

近代化の中で横濱・神戸が開港（横濱一八五九年・神戸一八六八年）されると、それぞれの土地に中國人が多く進出し、中華街が形成されていく。それに伴い、横濱

では初代關帝廟（一八七一―一九二三）・清國領事館に媽祖が祀られ、⁽¹⁰⁾神戸でも關帝廟（一八八八年建立）・阪神中華會館（一八九三年落成）に媽祖が祀られた。⁽¹¹⁾

これらの媽祖信仰の傳播は、在地の名主によって水戸・那珂湊から勸進された大間の例を除いては、基本的に中國人の移動に伴ってのものともみなすことができる。

では、このようにして近世・近代にかけて傳來した媽祖信仰は一九六九年時點でどのような状況にあったのであろうか。

沖繩・久米村の上天妃宮・下天妃宮は大正年間に壊されたが、一九六六―七七年の白鳥芳郎氏の調査時點では、久米村出身者や那覇の神棚にて媽祖を表す「感應」の横紙や、天妃の繪像がみられるなど、民間信仰への浸透が確認されている。⁽¹²⁾鹿兒島では、現在でも媽祖像を「ボサどん」などと呼び祀る家があるほか、一門を守護する「内神」に性格をあらためながら祀られる例が見られることから、これ以前においても何らかの形で信仰が繼續していたものと考えられる。⁽¹³⁾茨城の天妃信仰は幕末の社

寺改革のうちに、天妃を弟橘媛の同體とみなすことで在地神化した。⁽¹⁴⁾これらの例からは媽祖がそれぞれにかたちを変えながら、その土地に根ざしていった様子が窺える。

一方、華僑・華人を主な擔い手とする中華街での受容はどうであろうか。長崎では三唐寺で年三度、輪番で媽祖祭が行われていたが、その後、福建福清系以外の華僑・華人の減少に伴い三山公幫による崇福寺での聖誕供養のみが行われるようになった。⁽¹⁵⁾宮田安氏によれば、一九六七年時点で媽祖祭は崇福寺だけとなっていたようである。⁽¹⁶⁾神戸では關帝廟にて、媽祖祭が福建同郷會によって運営されている。⁽¹⁷⁾横濱中華街でも、(高橋氏の請來以降の)一九八六年に三代目の關帝廟が焼失するまで媽祖は廟内に併祀されていた。⁽¹⁸⁾

高橋氏による媽祖分靈の請來は、このようなそれぞれの土地に根ざした在地化と、華僑・華人による信仰の維持とが併存した中での新たな動きとして生まれてきたものであった。

二 一九六九年・媽祖像請來の経緯

高橋氏が初めて臺灣から媽祖の分靈を請來したのは一九六九年五月のことである。その経緯と概況をあらためて整理する。

黒羽氏も参照する『聯合報』および『中日新聞』の記事によると、請來に先立って北港朝天宮の天上聖母が岐阜で顯靈し、岐阜の市民が天上聖母を研究する「聖母會」を組織していた。⁽¹⁹⁾當時岐阜には一〇〇人あまり、全國には約三〇〇人の北港朝天宮信者がいたとする。⁽²⁰⁾

この「聖母會」が媽祖廟を岐阜に建てることになり、中華民國臺灣省文獻會の廖漢臣氏に手紙を書き、媽祖像を日本に迎える手助けをして欲しいと依頼。二十回以上の手紙の往來を経て、廖氏が北港朝天宮に諮り、贈呈が決まった。⁽²¹⁾

高橋氏を代表とする一行八人は五月二日に臺北に到着。同日に臺北・成都路の天后宮を訪問。⁽²²⁾翌二日に岐阜市長・松尾吾策の「請帖」を持参し、北港朝天宮を参拜。

四日に分靈儀式を舉行して神像を「開光」し、五日に媽祖生誕を祝う祭祀に参加、六日に歸國という行程であった。⁽²³⁾

北港朝天宮にとって媽祖を海外に分靈するのはこれが五回目であったが、これまでの四回は在外華僑相手であり、外國人の招請によるものは初めてであった(そのうち一回は一九六六年沖繩、一回は一九六八年大阪)。⁽²⁴⁾ そのため本事例は窪も「このことは臺灣省の新聞にも大きく報道された」と記しているように、當時臺灣でかなりの注目を受けたようだ。⁽²⁵⁾

このとき贈られた神像は、北港朝天宮が北港の吳居宅に制作を依頼したもので、媽祖像(高さ一尺六寸)の他、香花女二尊および千里眼・順風耳の計四尊(ともに高さ一尺二寸)を揃えた。これと別に臺北天后宮も同宮副駕の媽祖像(高さ一尺二寸)を贈る。これはもともと福建・莆田からきたものです。に百年餘りの歴史があり、當初西園路の媽祖廟にあったが同廟が日本軍に壊されたため、戦後、成都路に媽祖廟を開いた際に迎えたものと

いう。⁽²⁶⁾

かくして、兩廟からそれぞれ一尊の媽祖神像と四尊の媽祖の侍神(香花女・順風耳・千里眼)、計十尊が贈られたが、あまり多いと飛行機に乗る時に不都合なため北港から贈られた五尊のみを持ち歸ったという。⁽²⁷⁾ この際には特別に輸出關稅の免除措置を受ける優遇もあり、臺灣側の友好的な姿勢が伺える。⁽²⁸⁾

このとき請來した媽祖像については黒羽氏も記すように、當初は媽祖廟(聖母堂)を岐阜公園ないし梅林公園に建てる希望を持っていた。⁽²⁹⁾ 高橋氏は一九七三年時點でも廟を建てる意思を見せているが、高橋周平氏によれば結局資金難により實現しなかったとのことである。

三 分靈の里歸り

高橋氏は翌年以降も分靈の里歸りを行っている。

●一九七〇年

一行十人は二月一九日臺北到着、同日夜に臺北天后宮に進香、翌二〇日に北港朝天宮に進香し、二二日に歸國

している。その際、本来は神像自體を伴うべきだが、税關の手續きが煩瑣であるとして、媽祖など五尊のカラー寫眞を替わりに携えている。⁽³¹⁾

また、梧棲朝元宮に送られた高橋氏の書簡（一九八九年一月附）によれば、二一日には同宮を訪れ媽祖および香花女二尊・太子爺の分靈を迎えている。⁽³²⁾

●一九七一年

一行十八人は四月一六日臺北到着、一八日に北港朝天宮に進香し、二〇日に歸國している。今回も媽祖のカラー寫眞を携えてきたほか、上松陽助岐阜市長から北港朝天宮主委・王吟貴宛の書簡および、何應欽將軍が岐阜市朝天宮（高橋氏自宅か）を訪問した際に贈った扁額の複製を北港朝天宮に贈呈している。⁽³³⁾

また、梧棲朝元宮に送られた上松岐阜市長の書簡は同年附になっていることから、この訪臺時に高橋氏が届けられたものと考えられる。⁽³⁴⁾

●一九七二年

五月三〜一五日まで北港朝天宮および梧棲朝元宮に進香。⁽³⁵⁾

『大甲鎮瀾宮志』などでは三月二四日に大甲鎮瀾宮から媽祖の分靈を迎えるとするが、これは舊曆表記であり、この巡禮期間中の新曆五月七日のことであろう。⁽³⁶⁾

●一九七三年

一行二二人にて、四月二三日臺北着、二四日北港着。二五日北港朝天宮の天后節の祭祀に参加。同日、馬鳴山鎮安宮・梧棲朝元宮にも参拜。二六日は大甲鎮瀾宮参拜、二七日に何應欽將軍を訪問の後、木柵指南宮を参拜



圖1 一九七二年里歸りの様子（高橋周平氏提供）

し、同日歸國。⁽³⁷⁾

また、五月二四日に臺灣文獻委員會が開いた中日媽祖信徒座談會に高橋夏三郎氏を含む三人が日本側として参加し、會議の席上で臺灣各地の媽祖廟の代表から、日本朝天宮進香團の訪臺の際に、彼らの廟も訪問して愨しいとの聲が上がった。また、臺南大天后宮の總幹事・陳振山氏と知り合い、臺南大天后宮から媽祖の分靈を迎えることとなった。このことを記念して上松陽助岐阜市長は臺南大天后宮に横幅六尺の扁額を贈った。⁽³⁸⁾ なお、同扁額は現在も臺南大天后宮に飾られている。⁽³⁹⁾

●一九七四年

一行約二〇人で、四月一四日に北港朝天宮に進香。⁽⁴⁰⁾ 別記事によると行程は以下の通り。⁽⁴¹⁾

第一日、臺北着後、臺南大天后宮参拜。第二日、同天后宮にて媽祖の分靈典禮に参加の後、朴子配天宮・北港朝天宮参拜。北港朝天宮では媽祖分靈の還郷を行う。第三日、北港朝天宮にて還郷を終えた分靈を迎えると、昨

岐阜に請來された媽祖について

年木魚と鐘を贈られたことへのお禮のために馬鳴山鎮安宮を訪問。ついで大庄浩天宮・梧棲朝元宮でも媽祖分靈の還郷典禮に参加。第四日、大庄浩天宮・梧棲朝元宮にて、それぞれ還郷を終えた分靈を迎え、大甲鎮瀾宮にて媽祖分靈の還郷典禮に参加。第五日に何應欽將軍を訪問の後、歸國。この第二日が四月一四日か。

●一九七五年

一行二〇餘名で朴子配天宮を訪問し、分靈を受ける。⁽⁴²⁾

●一九七六年

四月二一日に北港朝天宮に進香、翌二二日（舊三月二三日）媽祖聖誕祭参加。⁽⁴³⁾

高橋氏は一九八〇年に寄稿した「臺灣媽祖廟を巡禮する」という記事の中で、北港朝天宮から分靈を迎えて以來毎年里歸りを續けているほか、これまでに七つの廟（論者注…上記で確認された北港朝天宮・臺北天后宮・梧棲

朝元宮・大甲鎮瀾宮・臺南大天后宮・大庄浩天宮・朴子配天宮から分靈を迎えており、さらにこの年の夏には臺南の正統鹿耳門聖母廟からも迎える豫定だと述べている⁽⁴⁴⁾。これ以降の里歸りについては新聞記事などの記録は見つかっていないが、高橋周平氏に提供いただいた寫真から、一九八六年二月、一九八八年一〇月、一九九一年二月、一九九三年一〇月、一九九四年三月、一九九五年三月の訪問が確認できた。また、梧棲朝元宮の書簡から一九八九年一月にも訪問している可能性がある。高橋周平氏によれば、高橋氏はずっと里歸りを続けていたが、必ずしも天后節の時期にはこだわっていなかったとのことである。

四 媽祖請來の目的

先に見たように、一九六九年時点で岐阜市には「聖母會」という組織があった。同會は後述するように高橋氏を中心とした、岐阜における媽祖信仰と算命を主要な活動とした組織であったと考えられる。おそらく、同會を

發展的に繼承するかたちで、高橋氏は媽祖像請來後の一九七一年に宗教法人日本朝天宮を設立している⁽⁴⁵⁾。登記簿によれば、その目的を「天上聖母を本尊として、聖母教の教義をひろめ、儀式行事を行い、信者を教化育成すること」とし、その目的を達成するために必要な事業として「出版事業並びに信者の爲めの観光幹旋事業及び宿泊幹旋事業」を擧げている。

高橋氏は一九六九年時点ではスバル技研社長との肩書きであるが、大和パネコン建築在籍時（一九五六年出願）に大型プレキャスト・コンクリート板による建築物の特許も取っており⁽⁴⁷⁾、吉田武義氏によれば、訪臺の目的のひとつとして同技術の賣り込みやスバル技研の事業など實業面での調査・關係構築があったようである。また、後には高橋氏は日華興業貿易株式會社を興し、臺灣からの輸入業も始めているので、その業務との關連もあったであろう⁽⁴⁸⁾。

一九六九年の最初の進香團のメンバーについても臺灣の報道で岐阜市工商界の領袖と紹介されているほか、天

后節以外の時期に企業關係者を連れて訪臺したり、工場見學と參廟を合わせた進香觀光行程を組むなどしており臺灣とのビジネスに媽祖を通じて構築した關係を活用している様子がうかがえる。⁵⁰ また、日本朝天宮の目的に「信者の爲めの觀光幹旋事業」が謳われているように、このツアー自体も日本朝天宮と日華興業貿易株式會社が共同開發したものである。

むろん、高橋氏が媽祖を通じた日臺の經濟的連携を圖つたのと同様に、臺灣側からも高橋氏と日本朝天宮に、日臺の文化的・經濟的架け橋となる期待がかかっていたようである。⁵¹

五 高橋氏と媽祖信仰の接点…西川滿との

關わり

高橋氏はみずからが媽祖と出會つた時期について、「その年、私の十年運と一年運は加護の星と巡り逢つた。まさにその年（論者注…一九六二年）に、私の發明が全國發明表彰で『大臣賞』を受賞した。私が天上聖母と結

縁したのも、ちょうどその頃であつた。…それは天上聖母を信仰し、その庇護を獲得した時期であつた」と述べている。⁵²

さらに、媽祖は「富める者貧しき者、男女老幼を問はず、加護の星を與える者」であり、高橋氏は媽祖と結縁した者の義務として、加護の星の存在を知らず自らの悲運を嘆いている多くの人に對して加護の星が訪れる時を教え、彼らを助け勇氣づけ、生活の樂しみを増すことを使命と自認している。⁵³

このことから、媽祖信仰と出會い、その加護により成功を得た高橋氏が算命や媽祖信仰を通して信徒の未來を開き、助けることを目指していたことがわかる。

では、高橋氏はどのようにして媽祖と出會つたのか。

この時期、日本には媽祖を奉じて活動していた人物がいた。

高橋氏は最初の請來時の記事にて「日本人は媽祖を信仰するだけでなく媽祖の教義についても研究している。彼らは東京で『天后會』を創設し、『人間の星』を刊行

している」と語っている。媽祖請來の主體となった岐阜の「聖母會」も、その「天后會」の活動を受けて成立したという。⁽⁵⁴⁾

この「天后會」を主宰していたのが西川満であった。西川は日本統治下の臺灣で活躍した作家・文學者である。自ら設立した出版社を媽祖書房と命名し、その第一詩集を『媽祖祭』（一九三五年）と題したように、西川にとって媽祖は特別な存在であった。⁽⁵⁵⁾

戦後歸國した西川は文學活動の一方で、一九五八年十一月に算命の事務所を開業し、翌一九五九年には命運學の著書である『人間の星』を六興出版より出版している。⁽⁵⁶⁾さらに、一九六〇年に臺灣の讀者から媽祖像と千里眼・順風耳を贈られると、それを契機として祭壇を作り媽祖を祀るようになった。このことを自身では「天上聖母顯現」と表現している。⁽⁵⁷⁾

前出の「天后會」が設立されたのも同年のことであった。一九六一年には同會の機關誌である『人間の星』⁽⁵⁸⁾（一九七四年、同題の前掲著書とは別）の刊行も始まる。

同會では、媽祖を信仰對象とし、算命をその主要な活動としていた。西川の算命は生まれた日時を星と結びつけて判断する「天上聖母算命學」と呼ばれるものである。

高橋氏と媽祖は、この西川満を介してつながったと考えられる。機關誌『人間の星』二〇號（一九六四年九月）に高橋氏の投稿が掲載されており、そこで高橋氏は「わが家は朝、夕の二回、天上聖母さまに禮拜する習慣です」と述べている。⁽⁵⁹⁾

また、同誌二七號（一九六六年一月）には、「西川總裁を秋の飛驒小坂に迎えて、日本天后會東海大會を開くことになり九月五日岐阜市の高橋夏三郎氏宅に集合し打ち合わせをした」との記述も見られる。⁽⁶⁰⁾

ただ、高橋周平氏によると高橋氏は何らかの衝突によって西川と袂を分かった。その後も信仰からは離れず、岐阜において活動を繼續したが、おそらくはその際の初期組織が「聖母會」であったのであろう。そして、信仰のシンボルとして、西川の「天后會」にあったような媽祖像が必要となったのが、分靈を求めるきっかけとなっ

たという。⁽⁶¹⁾

おわりに その後の媽祖像

高橋氏は媽祖像請來後、日本朝天宮を組織して媽祖を祀るとともに、またその算命部門である「心の星算命研究会」において算命に従事した。⁽⁶²⁾ここでは媽祖は「悲しい宿命を幸福な宿命に變える秘法はただ一つ、正しい信仰をもつことです」⁽⁶³⁾「あなたの一生を司どる星を支配する天上聖母さまに祈りましょう」と高橋氏が呼びかけるように、西川滿の解釋を經由した、傳統的な海神からも、鹿兒島や茨城に見られる在地化した神格からも離れた、運命の守護者という新しい姿となっていた。西川の天后會が彼一代のものであったのと同様に、高橋氏の日本朝天宮もその逝去後は休眠状態となるが、戦後日本における独自の媽祖受容の可能性がそこにはあったといえるのではないだろうか。

あいにくと安住の地を得られず、当初は高橋氏の會社事務所、後には自宅にて祀られていた媽祖像であった

が、そのもとに、多くの人が自らの運勢を見てもらうべく足を運んでいた。

本稿で見てきたように、高橋氏の一連の交流には歴代の岐阜市長の姿が見え隠れする。最初の訪臺時に松尾吾策（第八代）からの「請帖」を持参したことに始まり、梧棲朝元宮に上松陽助（第九代）の書簡が、臺南大天后宮に同氏の扁額が、また馬鳴山鎮安宮にも蒔田浩（第十代）の扁額（一九七七年）⁽⁶⁴⁾が贈られている。吉田氏によれば高橋氏に助言を求める者の中には政治家の姿もしばしば見られ、市長とのつながりも算命によるものであるうとのことであった。

かくして、朝な夕なに拜せられていた媽祖像だが、二〇〇七年の自宅火災の際に失われてしまい、いまはもうない。日本朝天宮の痕跡は、わずかに高橋周平氏の手元に残るその看板のみである。

本稿執筆に当たっては高橋周平氏・吉田武義氏にご協力いただくとともに、論文公開および寫眞の使用について



圖2 媽祖像・高橋氏(右)・一九七二年
高橋氏自宅にて(高橋周平氏提供)



圖3 祖像安置の様子(媽祖像は判別でき
ず)・時期不明・高橋氏自宅にて
(高橋周平氏提供)

も「快諾いただきました。ここに記して感謝申し上げます。

註

- (1) 浦恒一「媽祖にひかれて」(『平戸史談』六、一九七七年) 四四頁、窪徳忠「西日本の媽祖信仰」(『アジア遊學』四一、二〇〇二年七月)。
- (2) 黒羽夏彦「日本の媽祖」 岐阜市に分祀された媽祖」(『ぶおるもさん・ぷろむなあと』 <http://formosan-promenade.blog.jp/archives/77341339.html> 二〇一八年八月二十五日〔二〇二〇年六月一日確認〕)
- (3) 前掲黒羽夏彦「日本の媽祖」 岐阜市に分祀された媽祖」。
- (4) 高橋氏へのインタビューは二〇一九年一月二九日に、吉田氏へのインタビューは二〇一九年九月一七日に行われた。
- (5) 宇宿捷「媽祖の信仰と薩南片浦林家の媽祖に就いて」(『史學』一五二、一九三六年)、李獻璋「媽祖信仰の研究」(泰山文物社、一九七九年) 四六一～四七七頁、陳佳秀「東アジア海域における船神信仰」九州、琉球列島への媽祖信仰の傳來」(『鹿兒島國際大學大學院學術論集』三、二〇一一年)。
- (6) 前掲宇宿捷「媽祖の信仰と薩南片浦林家の媽祖に就いて」、藤田明良「東アジアの媽祖信仰と日本の船玉神信仰」(『國立歴史民俗博物館研究報告』二三三、二〇二一年)。
- (7) 王維「日本華僑における傳統の再編とエスニシティ」(『風響社』二〇〇一年) 一九～二〇頁。

- (8) 前掲陳佳秀「東アジア海域における船神信仰…九州、琉球列島への媽祖信仰の傳來」、前掲藤田明良「東アジアの媽祖信仰と日本の船玉神信仰」。
- (9) 前掲李獻璋『媽祖信仰の研究』五六九～五九三頁、窪徳忠「東日本の媽祖信仰」(『アジア遊學』四二、二〇〇二年八月)。
- (10) 飯田樹典「横濱媽祖廟建立の背景から見た中華街における役割」(『メタプティヒアカ…名古屋大學大学院文學研究科教育研究推進至年報』五、二〇一一年)。
- (11) 前掲王維「日本華僑における傳統の再編とエスニシテイ」一五三～一五四頁。
- (12) 前掲李獻璋『媽祖信仰の研究』四八七～四八八頁。
- (13) 前掲陳佳秀「東アジア海域における船神信仰…九州、琉球列島への媽祖信仰の傳來」、前掲藤田明良「東アジアの媽祖信仰と日本の船玉神信仰」。
- (14) 菊地章太「東アジアの信仰と造像」(第一書房、二〇二〇年)一八九頁。
- (15) 前掲王維「日本華僑における傳統の再編とエスニシテイ」一〇三～一〇四頁、松尾恒一「戦後の在日華僑文化の一考察」(『國立歴史民俗博物館研究報告』二〇五、二〇一七年)。
- (16) 宮田安「崇福寺の媽祖」(『新風土』四、一九六七年五月)。
- (17) 前掲王維「日本華僑における傳統の再編とエスニシテイ」一五五頁。
- (18) 前掲飯田樹典「横濱媽祖廟建立の背景から見た中華街における役割」。
- (19) 「日將迎祀北港媽祖」(『聯合報』、一九六九年四月二二日)。
- (20) 「人種や國境越えて 『北港朝天宮』の分身、岐阜へ」(『中日新聞』、一九六九年五月一日夕刊)。
- (21) 「媽祖神像兩座 贈日本岐阜市」(『中央日報』一九六九年五月三日)、「遠渡東瀛媽祖 今日舉行開光」(『中央日報』一九六九年五月四日)。
- (22) 「日本進香團來臺迎媽祖」(『聯合報』、一九六九年五月三日)。
- (23) 前掲「日將迎祀北港媽祖」、前掲「日本進香團來臺迎媽祖」。
- (24) 「優待放洋神像 海關決豫免稅 眾神今乘機至日本」(『聯合報』、一九六九年五月六日)。
- (25) 管見の限りでは、『中央日報』(五月二～五月七日)、『聯合報』(四月二日、五月二～七日)、『中國時報』(五月二・五・七日)で報道が確認できた。
- (26) 「日岐阜市媽祖堂 今來臺迎聖靈」(『中央日報』一九六九年五月二日)、前掲「媽祖神像兩座 贈日本岐阜市」、「媽祖放洋今日開光」(『聯合報』、一九六九年五月四日)。

北港朝天宮は臺南の魏得璋にも制作を依頼したとの記述も見られるが、他の記事と付き合わせると、北港朝天宮から贈られた媽祖像は一尊と考えられる。

- (27) 「日岐阜進香團迎回媽祖神像」(『聯合報』、一九六九年五月七日)、「媽祖出國 人手一神像捧回日供奉」(『中國時報』一九六九年五月七日)。
- (28) 前掲「人種や國境越えて 『北港朝天宮』の分身、岐阜へ」。
- (29) 前掲「日將迎祀北港媽祖」。
- (30) 「祝『聖女春秋』創刊」(『聖女春秋』五、一九七三年四月)。
- (31) 「北港媽祖香期朝拜展開」(『中央日報』一九七〇年二月二〇日)、「日本媽祖歸寧 北港迎神送神」(『聯合報』、一九七〇年二月二三日)。
- (32) 二〇一八年九月一〇日、同宮にて論者確認。
- (33) 「北港鎮朝天宮 慶祝媽祖誕辰 祭典依照古禮舉行 日人組團前來進香」(『聯合報』、一九七一年四月一九日)。
- (34) 二〇一八年九月一〇日、同宮にて論者確認。
- (35) 高橋周平氏提供のアルバム(日本朝天宮一行『臺灣北港媽祖巡禮記念』所収の寫真による)。
- (36) 廖瑞銘總編纂『大甲鎮志』(臺中縣縣大甲鎮公所、二〇〇九年)一七四二頁および張慶宗等撰文・郭金閔主編『大甲鎮瀾宮志』四「文化薪傳」(臺中縣大甲鎮瀾宮董事會、二〇〇五年)一三一頁。
- (37) 「日本朝天宮天上聖母、今年仍將返祖廟進香」(『聖女春秋』四、一九七三年三月二〇日)第一版、「日本岐阜進香團抵達北港朝天宮、受到媽祖信徒熱烈歡迎」(『聖女春秋』五、一九七三年四月三〇日)。
- (38) 高橋夏三郎(王沿津譯)「進香與受恩—進香五週年紀念」(『聖女春秋』二四、一九七四年二月一日)。
- (39) 論者未見。高凱俊『大天后宮』(臺南市政府文化局、二〇一八年)二〇一頁。同書では一九七一年とするが、黒羽夏彦氏によれば昭和四十九年(一九七四年)の日附が入っているとのことで、同氏が撮影した寫真でも確認できる。(黒羽夏彦「臺南・大天后宮に於て」<http://for-mosanpromenade.blog.jp/archives/79900502.html>「ふおるもさん・ふろむなあと」二〇一九年五月二〇日、二〇二〇年六月一九日確認)。
- (40) 「日本朝天宮天上聖母今年仍將返祖廟進香」(『聖女春秋』一五、一九七四年三月一日)。
- (41) 前掲高橋夏三郎(王沿津譯)「進香與受恩—進香五週年紀念」。
- (42) 朴子配天宮公式サイト「大事年表」(二〇二〇年六月一九日確認)。
- (43) 「日本媽祖漸廣 媽祖過洋享血祀」(『聖女春秋』四一、一九七六年五月一日)。

- (44) 高橋夏三郎「臺灣媽祖廟を巡禮する 十一年間續く里歸り」(『岐阜日日新聞』一九八〇年五月二六日)。
- (45) 宗教法人登記簿によると高橋夏三郎氏を代表役員として一九七一年二月六日に成立。法人番號二〇〇〇一〇五—一〇〇〇九〇四。
- (46) 前掲「人種や國境越えて 『北港朝天宮』の分身、岐阜へ」。
- (47) 特許〇二六五二六五。一九五六年六月九日出願。(特許廳特許公報 昭三五―四六四〇) 同發明で、高橋氏は昭和三七年度全國發明表彰において「發明賞」を受賞している。(公益社團法人 發明協會「全國發明表彰 昭和37年受賞者一覽」http://koneki.jii.or.jp/hyosho/zenkoku/pastchiran_pdf/s37zenkoku.pdf [二〇一〇年六月一九日確認])。
- (48) 高橋周平氏によれば、日華興業貿易株式會社では臺灣からローヤルゼリーなどを輸入していたとのことである。また、高橋氏は一九九一年には龍眼酢や龍眼ワインの醸造に關する特許も申請している(出願番號 特願平三一八八九〇五五)。
- (49) 前掲「日本進香團來臺迎媽祖」。
- (50) 「朝天宮甲寅年花燈展業於元宵節隆重揭幕」(『聖女春秋』十五、一九七四年三月一日)、高橋夏三郎著・王治津譯「進香與受恩—進香五週年紀念」(『聖女春秋』二四、一九七四年十二月一日)。
- (51) 「從譯讀高橋氏『新年的祝福』想到中日文化經濟合作交流的前途」(『聖女春秋』二四、一九七四年十二月一日)。
- (52) 高橋夏三郎「祝『聖女春秋』創刊」、『聖女春秋』五、一九七三年四月三〇日。高橋氏が受賞したのは一九六二年である。(高橋夏三郎ら「全國發明表彰者」、『毎日新聞』一九六二年四月八日)。
- (53) 前掲高橋夏三郎「祝『聖女春秋』創刊」。
- (54) 「日本來朝『聖』媽祖將分『靈』」、『聯合報』一九六九年五月五日。
- (55) 西川滿の媽祖觀については張瑜庭「跨越時代、國界的書寫—西川滿筆下戰前戰後的媽祖形象比較」(『媽祖信仰文化暨在地人文藝術國際學術研討會』二〇一二年一〇月二〇—二二日、<http://gitci.ccu.edu.tw/project/2012mazu/ch.html>)に詳し。
- (56) 西川滿「わが越えし幾山河」(人間の星社、一九八三年)六四―六五頁。
- (57) 前掲西川滿「わが越えし幾山河」六六頁。ただし、西川の信仰する「媽祖」は「今日、臺灣を中心として、廣く南支にマソ信仰が傳わっているが、天后會の聖母信仰は、單なる現世的マソ信仰ではなく、マリヤ、マヤ、マソこの三つの分身を綜合した久遠の生命としての天上聖

母信仰」というように、傳統的な媽祖信仰に独自の解釋を加えたものとなっている（『星への祈り』、『人間の星』四六、一九七〇年夏、九頁）。

(58) 西川の戦後の算命活動やその思想に關する先行研究としては、黃耀儀「戦後における文學者西川滿の宗教活動に關する一考察―『人間の星』を中心に―」（『東吳日語教育學報』五二、二〇一九年）がある。

(59) 高橋夏三郎「至福の恩寵を受けて ★發明と信仰★」（『人間の星』二〇、一九六四年九月）。

(60) 服部芳幸「すがりて天を仰ぎなば」（『人間の星』二七、一九六六年一月）。

(61) 西川は「この世の中にはあわてん坊がいて、天上聖母と名がつけばみな同じだと早合點し、玉皇上帝配下の道教的な地方水神を臺灣あたりからかつぎだして、三拜九拜しているが……その愚は氣の毒と申すしかない」（『アンドロメダ』一四、一九七〇年一〇月）と述べているが、あるいは高橋氏を念頭に置いての言であらうか。

(62) 日本朝天宮の算命部門として、「心の星算命研究会」が存在したが、同會の算命表である『心の星座』（高橋周平氏所有）を見ると、星の名に東洋の呼稱と西洋の呼稱が併存するなど、西川滿の影響が色濃く見られる。

(63) 『心の星』日本朝天宮・心の星開發研究会。
(64) 二〇一九年三月論者確認。

執筆者紹介

細井 浩志 活水女子大學教授

中村 琢 福岡大學非常勤講師

孫 瑾 中國海洋大學文學與新聞傳播學院
中國古代文學民俗文化講師

中塚 亮 愛知淑徳大學等非常勤講師

富田 繪美 早稻田大學大学院文學研究科（東洋哲學コース）博士後期課程

池内 早紀子 大阪府立大學大學院人間社會システム科學研究科博士後期課程

土屋 昌明 専修大學國際コミュニケーション學部教授

森 由利亞 早稻田大學文學學術院教授